

---

# カエルの王女様

水月 灯

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

カエルの王女様

### 【Nコード】

N5653K

### 【作者名】

水月 灯

### 【あらすじ】

これは、暗殺者として差し向けられた魔法使いと、虐げられ家出をした元王女様の物語。  
中編小説本編完結済み。

## プロローグ：あの時、全ては始まった

むかしむかし。

ある所に、それはそれは美しい姫がおりました。

一国の王女ではありませんでしたが、母親が庶民の出であり、尚且つその母も姫が幼い頃に儂くなってしまった為に、姫には後ろ楯となる存在がおらず、孤立していました。

父王は母親譲りの美貌を持つ娘を可愛がりましたが、正妃である継母をはじめ、異母兄弟や周囲の人間達は、身分が低いからと皆姫を疎んじていたのです。

そんな境遇から逃げ出してしまったのか、やがて、姫は行方知れずになってしまったのでした。

「…くだらない」

僅かに表情を歪めて、黒衣の魔法使いはそう呟いた。

彼は、この国で一番強い魔法使いとして名高い存在である。

ただし、その容貌が異相であるとして、公の場に駆り出されることは少なかった。

人々は皆、彼の見た目を恐れるからだ。

国王専属の『異形の』魔法使い。そんな蔑称を付け、その魔法の恩恵を受けながらも、王の周りで働く者達は皆、彼を見下し同時に忌避していたのだ。

人に受け入れられる容姿ではないと知っていたが故に、彼は常に

黒のローブに身を包み、そのフードで顔を覆い隠していた。そのまま辛うじて見えるのは、口元だけ。

「本当に、くだらない…」

国の一大事や大規模な災害が起きた場合は、すぐに彼が駆り出される。けれど平時、国王付きの魔法使いとされている彼の元にやってくる命令は、国王の私的な用事に関するものばかりで、それも世間の裏、例えば誰かを暗殺しろだとか　綺麗とは言えない仕事ばかりであった。

今回も、同じようにくだらなく汚い指令。

曰く、逃げ出した隣国の王女を探し出し抹消すること、だった。

王女とはいえ、妾の子で身分は低い。

どうやら真の依頼主は、隣国の王の正妃であるようだ。

隣国は同盟を結び、互いに利益を与えあっているお得意様だ。外交上、断れない依頼であったのだろう。

その代わりに何かしらの大きな見返りを示され、国王はあっさりと受けたのだと思われる。

隣国の現王は暫く前に病に倒れ、もう余命幾ばくもないと言われている。愛しい娘のことを気にすることもできない為に、その正妃は夫に邪魔されることなく、忌々しい王女を殺すことができるというわけだ。

急に倒れたというその背景にも、恐らく正妃の何かしらの関与があるのだろう。

この国でも、つい何年か前に、国王の息子達が後継ぎの座を奪いあつて殺し合うことがあつた。結局は相討ちとなり共に倒れ、今は、国王が何人もいる側妃の一人に産ませた赤子が、次の王位継承者と目されているが、どうなるかはわからない。結局、どの国の王侯貴族も同じで、王宮では日々、他者を陥れ自分が這い上がるうとする者達の思惑が交差しているのだ。

大いなる力を持つ魔法使いは、権力のせめぎ合いに辟易していた。くだらないことに付き合つのは気が進まない、と。

それでも、彼は王家に仕えると誓約を立てさせられていた為に、逆らつことは出来ない。

渋々ながらも、その仕事を受けざるを得なかったのだった。

**ブログ：あの時、全ては始まった（後書き）**

HPで完結している話を加筆修正して載せていきます。展開がやや早めなのでつじつまが合わない所があるかもしれませんが、ご容赦ください。

## 第一話：戸惑いの闇

魔法使いは、王の命令通りに、隣国の姫の居場所を探した。

この国に逃げたことまではわかつてはいるが、それから先の足取りがぱったりとわからなくなっているのだという。

自国から出奔し、あてもなくどこかへ行ってしまったのならば、何不自由なく暮らしてきたであろう姫君に、生き延びる術がそうあるとは思わない。放っておけばのたれ死ぬだろうに　そう思いながら、国中を範囲にかけた探索の魔法で見つけた姫は、何と、近隣の民ですら危ういと近づかないような、生い茂った緑の深さによって、鬱蒼とした暗さを振りまく森の中にいた。

元々、いつの時代かに建てられたと思われる小さな小屋に住み、驚いたことに、自給自足の生活を営んでいたのだ。

その小屋は、森の大分奥に近い場所にあった。その辺りは少し開けていて、確かに人が住めなくもない。

耳を澄ませば、どこからか水の流れる音も聞こえてくる。

あちらこちらに修繕の跡が見られ、ひとりの人間の住まいとして作り変えられていた小屋に辿り着いた魔法使いは、自らの手で作ったらしい菜園にて、頭にほっかむりを巻き泥だらけになりながら、野菜の手入れをする姫の姿を見て、普段ほとんど表情の無い顔が余計に固まる程、目を見開いて呆然としてしまった。

「……………貴方、誰？」

胡散臭そうに投げかけられた視線。

問い掛ける声は、凜として張りのあるとても美しいものだった。

畑仕事をしていたせいで結いあげられた銀色の髪は乱れ、汚れた手で拭ったのか白い頬もまた泥が付いていたが、それでも彼女の美

貌は損なわれていない。

何より目を引く榛色の大きな瞳は、生命力に満ち溢れていて、ただ着飾って生きるだけの貴族の姫君達とは違い、生き生きとした魔力を放っていた。

「  
」

思わずあらゆる意味で度肝を抜かれました。魔法使いは、言葉が出ない。

隣国の王の娘、つまりやんごとなき血筋の王家の姫であるはずの十六歳の少女は、雑草を引き抜いていた手を止めて立ち上がると、土を払って、おもむろに片方の手を伸ばし

「  
……！」

「人と向き合う時に、フードなんか被ってちゃ駄目って習わなかった？」

頭に被っていたフードを払いのけられ、魔法使いはぎょっと目を剥く。

とつさのことで、魔法を使うことも出来なかった。……否、常ならば無意識の内に身から溢れ出る魔力によって、彼女の手は弾かれていただろうに、それが為されなかった。

フードを被り直す前に、少女と真っ向から目が合ってしまった。僅かに見張られた榛色に、ばつが悪くなり、再び顔を隠そうとフードを握るが、それよりも早く少女は口を開く。

いつものように、気持ち悪いとか何とか言われるのだろうと思っていた。

けれど、耳に届いたのは予想だになかったことで。

「うわあ、綺麗な髪と瞳。貴方、余程精霊に愛されているのね」

それは、生まれて初めて言われた、拒絶ではない言葉だった。嫌悪でも畏怖でもなく、心からの称賛と感嘆の台詞。故に、彼はどうすれば良いか分からず、三度硬直する。

……彼の瞳は、生まれた時から真っ赤に染まっていた。瞳孔も虹彩も、一見見分けがつかない程深い真紅に。

血のような目の色の人間など、他にいない。それに、彼の髪は闇のように真っ黒だった。この大陸に、彼のような髪色の人間はいない。

かといって、他大陸に黒髪の人間がいるとも、聞いたことがない。黒髪も赤眼も、異形の印であった。

忌み嫌われこそすれ、今まで誰にも、こんな風に受け入れられたことなどなかったのに。

「もしかして、魔法使い？ この子達、すごく貴方が好きみたいね」  
少女は何の躊躇いも無く、近くに居た風の精霊に触れた。  
手の平サイズの小さな人形のようなそれは、人の目には普通映らない。

それどころか、触れることも出来ない。

なのに少女は平然と精霊の頭に触れ、撫でてやっている。

言葉を持たない精霊は、嫌がるどころか嬉しそうにはにかんでいた。

自由を愛し人間に囚われることを好まない風の精霊が、逆に彼女に纏わりつくようにしている。

良く見ると、榛色だと思っていた瞳は、鮮やかな黄金色。

「聖眼……」

彼の瞳は、邪眼と呼ばれている。

悪魔に魅入られた者の印だと。

その反対に彼女のそれは、神の寵愛を受けた者の証であるとされていた。

聖なる瞳を持つ者が、何故邪悪な瞳を持つ者を構うのか。

彼には、目の前の少女が理解できなかった。

精霊達は嬉しげに二人の周りを取り囲んでいたのだが、彼は戸惑うあまり、それに気付く余裕すらなかったのだった。

## 第二話：魔法のことば

「で、私に何の用なの？」

陶器で出来たティーポットを小さな木のテーブルの上に置くと、少女は改めてそう尋ねた。

目の前で良い香りと湯気を漂わせる香茶を見、テーブルに備え付けられた椅子に座っていると、自分はどうしてここにいるのだろうと本気で考えてしまう。

何の用事であったかと一瞬忘れかけたが、流石にそれは出来なかった。

だが今更、茶まで出されてもてなされているこの状況で、どうやったら本来の任務を遂行出来ようか。

なんだかとても気が抜けてしまって、戸惑うばかりだ。

先刻、彼は、目の前で茶菓子　彼女の手作りらしく、美味しそうな色とりどりの果実のタルトである　を頬張る少女によって強制的に小屋の中へ引きずり込まれ、反応に困っている間に、身繕いをした彼女に茶を振る舞われた。

そうして今、昔からの知己のようにもてなされているわけだった。

「……………」

殺しにきたなどと普通、堂々と言える訳がない。

暗殺の対象と触れあうことなど当然ながら普段は無く、それだけでなくとも人とまともな会話を交わしたのは久しいことである為に、何を言えばいいのか、ごまかしの言葉すら出てこなかった。彼は無口かつ、口下手なのだ。

無言で表情も変えずに、しかし悩んでいる気配を漂わせている彼

をじつと見ていた少女は、ふいに、くすりと微笑んだ。

「 貴方、不器用ね」

「 ……? 」

「私を殺しに来たんでしょ？ 大方、あの義理の母の差し金かしら」

悠々と茶を口にしながら、動じた様子も無くそんな言葉を紡がれては、魔法使いの方が言葉が出ない。

姫君は、顔色ひとつ変えないまま、やれやれと言いたげに肩を竦めた。

「昔からしよつちゆうあつたことよ。でも、さすがに魔法使いが来たのは初めて。貴方、この国の人よね？」

私の国には魔法使いなんて稀有な存在いないもの、と少女の声は続ける。

「 …… 」

ひとつ、ため息を吐いて。

目の前の相手に困惑ばかり抱かせられている魔法使いは、取り繕うことすら億劫で、自分が何をしにここへ来たのか、全て話すことにした。

どうせ、相手はほぼ全部事の次第をわかっているのだ。

少女のペースに巻き込まれていることを自覚しつつも、端的に、ぼつぽつと言葉を紡いだ。

「うーん……」

彼は知りうる限りの情報を少女に伝えたのだが、少女は何かに悩んでいる。

自分が殺されそうになっている状況を、何とかして打破しようとしているのだろうか。

だが、それにしても反応がのんびりしすぎている。

「一つ、わからないことがあるんだけど……」

少女はひたと、魔法使いの瞳を見つめた。

彼女があまりに気にしないものだから、今はフードを被っていない。

これほど長い間、外で顔を覆っていないことは初めてだから、違和感が否めないが、フードを被るのはこれまた今更に思えた。

「どうして貴方程の力の持ち主が、こんな仕事をしているの？」

こんな仕事、とは王家の 王の専属であり、汚れ仕事の多い魔法使い、ということだろう。

国一番の魔法使いという立場は、表向きのものでしかなく、彼は王族の体のいい駒に過ぎない。

無言で、黒いローブの右袖を捲った。

現れた、満足に栄養を摂っているのか疑わしいほどに細い右腕には、上腕から手首にかけて、赤黒い痣のようなものがあった。

円や蛇行した線が複雑に組み合わされた図形のようなそれは禍々しく、よく見れば少女には解読出来ない言語が小さくびっしりと書き連ねられて出来ている。

文字が、線を 図形を描いているのだ。

「呪い……」

息を呑み、眉を顰めながら彼女は呟く。それが一目で呪術である  
と見抜いた少女に、魔法使いは表情にこそ出さないが、深く感嘆し  
た。普通の人間は呪いのことなどわからない。それが聖眼の恩恵だ  
としても、彼女はかなりの博識のようだ。

「俺はこの呪いに縛られている。……命令には逆らえない」

彼は生まれ落ちたその時に、実の親に捨てられた。

真冬の凍えるような寒さの中、昼間でも日の光の届かぬような路  
地に、塵芥でも捨てるかのようにあっさりと放り投げられたのだ。

一枚だけの、薄汚れたぼろぼろの毛布に包まれて。

流石に、生まれてすぐの記憶は遠い。

だが、温かいはずなのに冷たい腕が、無慈悲に、赤子の自分を躊  
躇いもなく地面へ放った感覚だけは、どうしてか覚えている。

その時、本能的に魔力を使ったらしく、生き延びる為、自分の身  
を守る為に、辺境の孤児院に転移したらしい。

物心ついた頃には、疎まれ蔑まれながらも、その孤児院で暮らし  
ていた。邪眼の子どもは嫌悪の対象だ。土地によつては間引きされ  
る可能性もある。すぐに殺されなかつただけ、幸運だった。

人の仲間など一人もおらず、好意を示してくるのは精霊達だけ。

人には忌み嫌われても、人の言葉の通じぬ、無垢な精霊達は何故か  
彼を好いてくれた。

ろくな食料を与えられなかつた赤目の少年の為に、お腹が空いて  
いるらしいと察したら、精霊達は果物や木の実をどこからか運んで  
きてくれたりして、彼の命を繋いでくれたのだ。

そうしてひっそりと生きてきたのに、ある日、彼はその存在を  
聞きつけた王家の人間に売られることとなる。邪眼の持ち主は総じ  
て魔力が高く、生まれながらにして魔法を使う術を心得て生まれて  
くる。その類稀な力を求められ、いつでも金の工面に困っている孤

児院の大人は、容易に彼を売り払ったのだった。

魔力の一切を封じられ、精霊達の助けさえ得られぬ外部と隔絶された場所に閉じ込められて、彼は選択を迫られた。

このまま飢えて死ぬか、それとも絶対の服従を誓って生きるか。

幼い少年はこの時、自分の中の生への欲求を自覚する。死にたいと思ったことはなかったけれど、生きていたいと思ったこともなかった。けれども、今まで育ってきた中で世話になった精霊達が、彼を探していることだけが、心残り。彼らに会いたい、まだ死にたくはないと感じたのだ。

故に、彼はこの呪いを施されて生きることとなる。

魔術と呪術を組み合わせて作られた呪いは、それを掛けられた少年に多大な苦痛を強いた。

三日三晩、激痛に苛まれた。何度、死んでいた方がましだったと思ったことか。自害すら許されぬ中、救いは何一つない。

漸く痛みが治まった時には、精霊との触れ合いでかろうじて形成されていた感情と言うものの殆どが、消え失せていた。

そして、彼は飼殺しにされる。

人を殺める能力を身につけさせられ、無理やり魔法を使うことを要求された。王の命令に逆らえば、呪いが身を蝕む。誰かを傷つけることすら知らなかったのに、突然放り出されたのは、見知らぬ人間の血の海の中だった。そうやってまた、心は閉ざされていく。

精霊達は、自分達の愛し子を取り上げられて怒り狂い、数年の間、この国は大凶作に見舞われた。

精霊の怒りが鎮まったのは、紅い瞳の少年が、魔法使いとして世間に姿を現した為。

大切な子どもが戻ってきたと精霊達が喜んだために、彼らと共に在る自然もまた、落ち着きを取り戻したのだ。無邪気な精霊達には、

彼自身が何かを感じていなければ、どのような状況に置かれているのかわからない。何かが違うことに戸惑いつつ、傍にいられることだけで精霊達は荒れなかった。

自然界の物は精霊が穏やかでなければまともに育たない。その為、国王は邪眼の少年を精霊の目に触れるようにしたのだった。

そうやってずっと、国に仕えてきた。長い間、どれだけ蔑まれても、心はもうほとんど何も感じずに。

強制された任務を黙々とこなし、気付けばもう、その手は赤く染まりきっていたのだ。

人生の経緯を言葉少なに語り終えて、彼は今更ながらに何故こんな初対面の少女に自分のことを話しているのだろうと再度自問した。彼が彼女に伝えたのは、過去のほんの一握りのこと。孤児であった為に売られ、呪いを掛けられて服従しているということだ。

けれども、誰かと言葉を交わすことも滅多にない上、こんなに長く人と話したことは初めて。

自分の生い立ちを人に話したことも、勿論はじめてのことだった。

「……………なにそれ」

「？」

「冗談じゃないわよ、人を何だと思ってるの!？」

憤りを露にして急に少女が立ち上がったので、椅子ががたんと音を立て、ティーカップと共に机が揺れた。

その拍子に、香茶が少し机上にこぼれる。

「いぼね…」

「お茶なんてどうでもいいの!それより、どうして貴方はそんなに何もかも諦めてるのよ!？」

「……………」

「せめてもつと憎むとか、恨むとか、反抗するとかないの!？」

「俺は、そういった感情がどういうものか、もうあまりわからない」

「え……」

「元々、人間の感情には疎かった。今はもう、煩わしいという程度の気持ち位しか、よくわからない」

「……………わからない?」

問い掛けに、魔法使いはただ頷く。

自分を落ち着かせるように深呼吸し、息を整えてから、少女は尋ねた。

「……………ねえ、貴方の名前は何か？ 私の名前はルース。ルシオラ・フリーネよ。王家の名前は捨てたから、それだけ」

「……名前……」

「……………もしかして、無いの?」

「……………」

「じゃあ、私が付けるわ。無いと不便だし 名前って大切なものよ。そうね……………」

暫し悩んだ後、少女は一つの名前を提示する。

「貴方の名前はユーリス。かつての偉大な正義の魔法使い、ユーリスディカスからとって、ユーリスよ」

にっこりと笑って、蛍火を冠する名の少女は、魔法使いに正義の名を与えた。

そうして、びしりと指先を魔法使いに突きつけると、宣言した。

「決めた。ユーリス、感情がどんなものか、貴方が思い出せるよう

に手伝うわ。うっん、少しでも、思い出させてみせるからっ！」

覚悟してね、などと言われても、どうすれば良いのか。

魔法使いはとりあえず、

「はあ……」

という、間の抜けた返事しか返せなかったのだった。

その出会いを、奇跡と呼ぶならば。魔法を使えぬはずの少女にこの時、感情を忘れた魔法使いは、言葉の魔法を掛けられたのだと、後に思う。

## 第二話・魔法のことば（後書き）

色々ごめんなさい。書きなおすのって難しい…そしてこの話が元々あまりに薄っぺらかったことに絶望した！

### 第三話・日溜まりの中で

「……ルース、畑に肥料を撒いておいた」

「ありがと！　じゃあ、お水を汲んできて。帰ってきたらご飯にするわねー」

「………」

小さな竈の下で燃える薪は、先日外で割ったばかりのもの。ぐつぐつと音を立てて良い匂いの漂うスープが入っている鍋は、彼女が逃亡中に買い求めたものの一つであるらしい。金銭の類は王城から持ち出した調度品を売り払って工面したそうだ。

夕食の支度を整えるルシオラに用事を頼まれ、魔法使い　ユーリスは無言で了解した。そして、そのまま踵を返して小屋の扉に向かおうとした。

途端、頭に何かがぶつけられる。すこーんと、良い音がした。

「………な…？」

「無言じゃわからないでしょ？　ちゃんと声に出してっついても言ってるじゃないっ」

振り向けば、頬を膨らませて怒る少女の姿。

彼の足元には木尺が落ちていた。

どうやらこれを投げたらしい。

彼女は良く、怒ると物を投げる。姫君とはあまりお淑やかなものではないらしい、と最近彼は、やや間違っている知識をつけてきていた。

「………悪かった………」

「もう、次やったら本気で怒るからね！」

ぷりぷりと腹を立てながら、ルシオラは包丁を片手に野菜を刻み始めた。

良い所のお嬢様は料理など出来ないものだが、彼女は育てられた環境が少し特殊だったらしく、様々なことができた。それ故に、この森まで逃げ落ち、生き延びることができたのだ。

庶民が着る粗末な服を当たり前のように身に纏い、質素な生活をする事だって、貴族には普通耐えられない。

狩りをし動物を捌き調理する方法、野草を薬に調合する仕方、大工仕事に農耕の知恵、自衛の術まで、彼女は色々なことを身に付けていたからこそ、自給自足の生活ができたのだ。

勿論、小屋に住み始めた当初は、衣服や調理具など、自分一人では作り出すことが困難なものもあったので変装して近くの町にこっそりと買い求めに行ったこともあるらしいが、今では一通りのものが揃っているの、完全に外界との接触を絶つたらしい。元々、人と接することは好きだったようで、彼女はよく、彼を相手にたくさんのことを語りかけてくる。その際、無口な彼があまりに言葉を返さないの、よくよく叱られてしまふのだった。

木尺を拾ってテーブルの上に置き、ぶつけられた頭を擦りながら小屋を出て行く。

扉の側にあつた水桶を持つとすると、二つあるそれが自然と浮いた。

「……………有難う」

感謝の言葉を口にすれば、嬉しそうに桶が跳ねる。

勿論、桶自身が勝手に浮いたわけではなく、その下で、いくつかの精霊が桶を持ち上げているのだ。精霊は人の超小型版のような形をしていることが多いため、数人の小人が楽しそうに桶を持ち上げ

ているように見える。この間この光景を目撃したルシオラは、可愛い可愛いとご機嫌だった。

木の枝を掻き分け、草を踏みしめて歩く。小屋の近くを流れる小川に近付いて行きながら、ユーリスはふと、ルシオラの宣言の日からもう一月が経つのだと考えた。

感情を取り戻す手伝いをすると言われてから、呆然としている間に、彼は彼女と共に暮らすことを決定されていた。

小さな小屋なのでルシオラの寝室と居間以外に部屋が無いのだが、精霊達がどこからかたくさん布地を持ってきて、小屋の隅に敷き詰めてくれた為に、簡易の寝床としてそこで寝起きしている。

正直、暗殺のタイミングを完全に逃してしまつて、そのままずると来ているのだった。

彼女が自分に何を思うのだろうと思つていたが、特に何か特別なことをされるわけでもなく、炊事、洗濯、野菜の世話など、何故か家事を手伝わされた。

傍から見れば夫婦の真似事でもしているかのよう。実態は、若い女主人と居候、と言つた体なのだが。

ルシオラにああしてこうしてと 薪割りをしろ、野菜を刻め、屋根の修繕をしる等々 指示を受けながら過ごしていく間中、彼は人としての礼儀だの作法だの常識だのを、家事と同時に叩き込まれた。人と…誰かと一緒に生活するなんて、初めてで。

そうして暮らすことは慣れないことばかりで、戸惑いが大きかった。

ルシオラが何を考えてあんな宣言をしたのかわからないが、くると変わる彼女の表情を見聞きして、否応無く働かされ、触れあう中で、彼の生活が大きく変わったことは言うまでもない。

どんなに小さなものでも、怪我をすれば心配してくれ、手当てしてくれる。

何かを為せば礼を言われ、何の打算も無い笑みを向けられる。

誰かに何かをしてもらつたら感謝を伝えるべきなのだという事

や、悪いことをしたら謝ると言うことなど、普通の人間の感覚だと当然らしいことが彼には全て初めて知ることばかりで、新鮮な驚きを得ていた。

一日一日が、これまで無意味に過ごしてきた時とは違い、密度の濃い何かで満ちているようだ。

ここ数日、くすぐったいような感覚が胸の中で蠢くことが多くて、何か病にでも罹ったのかと首を傾げていたら、呆れたように、しかしどこか嬉しげに溜め息を吐いたルシオラに、それはきっと喜びといった感情の発露では無いのかと言われ、目を見開いたことは記憶に新しい。

「……ユーリス、か」

正義の名前など、自分には相応しくない。

与えられた時、真っ先に思ったのはそんなことだった。

今でも、その認識は変わらない。

けれど　彼女が名前を呼ぶだけで、どこか温かいものが身体を流れるのは何故だろう。

これは、何を表わす感覚だっただろうか。

この異形を気にされるわけでもなく、見下されるわけでもなく。彼女は自分の正体を知っているくせに、自然に接し、まるで古くからの知り合いのように遠慮がない。

ここでの暮らしは酷く和やかで　遠い昔、孤児院で精霊達と触れ合っていた時と同じか、それ以上に、ひどく過ごしやすいものであるような気がしていた。

#### 第四話：答えの在処

太陽はとうの昔に沈み、森には夜に属す者達の鳴き声が響いている。

松明の明りは随分前に消され、小屋の主は、健やかな寝息を立ててぐっすりと寝入っていた。

月や星を眺めるのが好きだという少女は、寝台の側の壁に空いた小さな穴から夜空を見ながら眠るのが常らしく、修理しようと思えばすぐにでも塞げるだろうその穴を、そのままにしている。

隙間風が入るのでは、と問えば、冬になったら塞ぐわよと軽く流していた。

幸い、雨は降り込まないような位置にある。

月の光が僅かに射し込んで、少女の無垢な寝顔が見えた。

そのあまりにも安らかな寝顔に、彼は小首を傾げる。

何故、彼女はこれほど無防備に眠ることが出来るのか。

流石に、彼が此処へ滞在することとなった当初、二三日はやや警戒していたのか緊張していたのか、これ程までに安眠はしていなかった。

けれど一週間も過ぎた頃には、今目前で晒されているように、深いまどろみの姿を見せていたのだ。

「……………」

物音ひとつ立てずに寝床から起き上がり、魔法使いは少女を見下ろした。

細い首は、少しばかり力を込めればすぐに折れるだろう。そうではなくても、魔法を使えば一瞬で彼女の命は消える。

自分が何を為しに来たのか知っていて、どうしてこの少女は、こうして眠っていられるのか　彼には、わからなかった。

ふと先日、彼女がぼつぼつと語った話を思い出す。

仮にも隣国の王女であったはずのルシオラは何故、あれ程に生き残る術を心得ているのか……それは、彼女の実母に理由があるのだという話だった。

ルシオラが現在名乗っているのは、彼女を生んだ母の姓。

隣国の城下町のある場末の酒場に、歌姫と呼ばれる美しい女性がいた。

亜麻色の髪に珍しい琥珀の瞳、見た目は飴細工のように繊細そうな美しさを持つ女性だったが、その実、絡んでくる男をすんなりとかわす話術を持つ賢い女性で、しつこい相手を投げ飛ばせる位、ある程度腕も立った。

その彼女に心を奪われた者の一人が、お忍びでやってきていた、在りし日のその国の王だった。

半ば強引に口説き落とした末に、歌姫は国王の側妃となり、一人の女兒を産み落とした。それが、ルシオラである。父譲りの銀色の髪、母譲りの美貌に、神に祝福された証と呼ばれる聖なる黄金の瞳。王は娘にも愛を注いだ。

だが、いくら美しくとも貴族ですらない女を娶り、熱烈に入れ込んでいるとあっては、元々気位の高かった正妃の嫉妬は凄まじかった。周囲の反発の声も目立った。

後宮では危なかるうと、城内にある離宮でひっそり暮らしていた母と娘だったが、正妃からの嫌がらせの数々に耐えながらも仲良く過ごしていたある日、母は難しい病に倒れ、帰らぬ人となってしまった。

王は最愛の女性の死を嘆き悲しんだが、残されたルシオラを可愛かった。

それが更に、正妃の憎悪を煽り、日毎に美しさを増すその美貌を疎んだこともあり、よくよく、毒物であったり刺客であったり、殺

されかけたのだという。

そんな時、役に立ったのは母から教わった数々の知識。

ルシオラの母は、この国の民と、遠い地を流浪する一族の血を引いていたのだ。古き賢者の末裔と密やかに謳われるその人々は、数多の知恵を持っていた。

それは祖母から母に、母からルシオラへと伝えられたもの。

王家の血よりも、その一族の血の方が誇らしいと、ルシオラは胸を張る。彼女を生かしてくれたのはその血のお陰と言ってもよいので、当然かもしれない。

いよいよもって己の命が危ういと感じて、間一髪で城を抜け出し、彼女は今の生活を送っているのだった。

父王が病床に伏しており、もう余命幾ばくもないことはとうに知っていて、ルシオラは怒ったように言っていた。あの人がもつとうまく立ち回っていれば、こんな目には遭わなかったと 確かに、彼女と母の置かれていた状況を作り出したのは父だろう。母親に対する思慕と敬愛の口調と、父親への態度の違いから、父のことはあまり、好いていないのかと思った。

しかし、精霊達が心配そうにしており、どこか悲しげだったことから、何となく、別に嫌いではないのかとわかったので、そのまま口にしたら……何故か殴られた。理由がわからない。馬鹿、鈍感、と罵られたことも正直、原因がわからなかった。

「……………なぜ…」

意識を回想から戻し、ぼつり、と言葉を漏らす。少女の寝顔は変わらない。

そういつた経緯を持つのに、どうして彼女は自分に警戒を持たないのか、本当に解さないのだ。

命を狙われる危険を身を以て知っていて、どうして。 。  
そしてわからないのは、自分が任務を全うしない理由。

いつだって、機会はあつたはず。

びく、と何かに不快そうに眉を顰めると、いつの間にか少女の銀髪に吸い寄せられるようにして触れ掛けていた手を引き、寢床に戻る。

いくつかの精霊が、こちらを伺うようにして近付いてくるのに、大丈夫だと仕草で答えて、身を横たえた。

少女はただ、彼が、答えの出ないいくつもの疑問を抱えているとも知らずに、母の傍らで安心した子どものように眠っていた。

第四話・答えの在処（後書き）

短くてすみません。

## 第五話：密やかな隠し事

その日もまた、彼は水汲みにやって来ていた。

この間は思考に耽り過ぎて時間が経ち過ぎ、帰るのが遅れて、料理が冷めるとルシオラに叱られたので、今日はあまり時間が掛からないようにしなければ。

そう思いつつもつつい、答えの出なかった先日のおたくさんの疑問について考え込んでいると　ふと、人の気配を察知した。

振り返った先に、一つの影。

「気付くのが遅いなあ。反応が鈍ったんじゃないか？」

そこに居たのは、ユーリスのような黒衣に身を包んだ、黒髪の青年だった。

瞳の色は赤ではなく、髪と同じ夜の色。割合整った顔立ちをしているが、目を見張るほどの美形というわけではない。

年の頃は二十代前半かと思われるが、実際のところよくわからなかった。

「お前は……」

「お前じゃなくて、トールだって。いつになったら名前を覚えるんだ？」

くつりと笑う相手に、ユーリスは感情の無い赤い瞳を向ける。

目の前の相手は、ユーリスが幼い頃から数年に一度の割合で目の前に現れる、神出鬼没の輩だった。

正体すら正確には知らないが、この所薄々見当はついていた。

とつくに名前は覚えてはいるが、相手が何を考えて自分に会いに来るのが全くわからない為に、不審に思っただけで呼んだことはない。

寧ろ、ユーリスが名前を呼んだことがある人間は、ルシオラ以外にはいなかった。

「……何の用だ」

「おいおい、チビは会ったらいつもそればかりだな。偶には他の事を言ってみようぜ」

「用が無いなら、帰る」

水を一杯に溜めた桶を持ち上げて、くるりと踵を返す。

その瞬間、ユーリスの動きは止まった。

指一つ動かした覚えは無いのに、いつの間にか再び、トールと名乗る男に向き直っている。

眉宇を寄せたユーリスをじろじろと見て、男は難しい顔をし、舌打ちをした。

「……無茶しやがる。お前ね、せつかく俺が進行を防いでやっていたのに、自ら無意味になるようなことをしてれば意味がないだろ」  
「……わかってる」

自分で自分の首を絞めていることなど、十分に理解していた。彼をじっと見つめ続け、トールはおや、と目を見張る。

「ふーん…そうかそうか。精霊達がお前が変わったっていうから見に来てみれば…そういうことか」

にやにやと笑い出す黒尽くめの男はユーリスの理解を超えており、訝しげに眺めることしか出来なかった。

トールの周りには色々な属性の精霊が集まっている。

全身で好意を表しながら、嬉しそうに彼にくっついてるのだ。  
その愛情の示され方はユーリス以上で、そのこと自体が、彼が何者であるかということに気付いた切っ掛けであった。

「……何だ」

「チビも成長したんだな。いやー、俺も感無量だぜ」

「……………」

今にも首を捻りそうな様子に、トールは内心ため息を吐いた。無自覚かよと。

「様子を見に来たんだが……そうそう、お前があまりにも任務を遂行しない上に使者を迷わせたりしてここに辿り着けないようにしてるから、痺れを切らしていけすかない奴が来るようだぜ」

「……………」

「本調子なら何も言わないが……呪いが効いてるだろ？ 今でも腕

一本動かすのもキツイだろうに、よく耐えられるな」

「…余計な、世話だ」

彼を苛む呪いは、術者が解かない限り消えない。

ルシオラを殺害するという任務をこなさない以上、呪詛が彼を蝕むのは当然のことだった。

それは、王家に背くということなのだから。

ルシオラと生活し始めて一週間で、右腕に激しい激痛が走った。

この呪いは時と共に苦痛を増加させ、全身に呪いの痣が広がり、死に絶えるというものだ。

既に身体の半分は、恐ろしい呪いに蝕まれている。

国王からの使者も、幾人も訪れているはずだ。

時間稼ぎにしかならないとわかっていて、この森全体に魔法を掛けて、よそ者が入れないようにした為に、未だこの地に他者が入る

ことはできないでいた。

それが、この男がわざわざ伝えに来たということとは、おそらく相手方も魔法使いか何かを導入してきたのだろう。

「どうするんだ？ もう猶予はないぞ」

問われて、気付いた。何故今まで気付かなかったのか。任務を遂行しなかったんじゃない。正しくは。

「……俺には、ルースを殺せない……」

できなかつたのだ。あの少女を手に掛ける自分などあり得ないと自身の何かが否定している。

それはすなわち、自分が死ぬしか道はないということ。ある意味物凄く惚れているのに、どうして自分の思いに気付かないのだろうとトールは呆れかけたが、少年が生きてきた道を考えれば、当然なのかもしれない。

彼が出会った時、この少年の感情は半ば壊れてしまっていた。出来うる限り、それ以上心が壊れてしまわないようにという策は取ってきていたが、まさか、短期間でこれ程までに回復するとは。

「……惚れたのか？」

「……？」

惚れた？

それは、恋だとかいう感情を自分が彼女に抱いているということだろうか。

躊躇いもなく差し出される手も、曇りの無い眼差しも、全て、心地好いと感じる。

きつと自分は、ルシオラを気に入っているのだろう。

しかし、それが人の間で言う恋なのかどうかは、彼にはわからない。

普通の人間の感情にすらししいのに、そのような複雑なことは理解し難かった。

またもや不思議そうにしているユーリスを、トールは複雑な思いの籠った眼差しで見っていたのだが、黒髪の魔法使いはそれに気付かない。

そのまま首を傾げていると、ふと、人の気配を感じた。

「今頃気づいたか？ 盗み聞きとは肝っ玉の座った娘だな」

「……聞こえたの。ユーリス、どういふこと。呪いのこと、どうして黙ってたの……！」

見知らぬ男の存在を気にも留めず、彼女は　ルシオラは、まっすぐにユーリスの元へやってきて、彼の腕を掴んだ。

とっさのことで耐え切れずに顔を歪めると、その隙に、少女は彼のローブの袖を捲り上げた。

露わになったのは、最早人間の腕とは思えぬもの。

「……っ！」

ルシオラは息を飲んだ。

まるで腕全体が鬱血しているかのように真っ黒で、所々から元の白い肌の色が覗いていた。

よく見ると、以前目にした呪いの原型のような模様や文字が、肉眼では把握しにくいほどに細かく腕を埋め尽くし、密かに蠢いているように見えた。

生理的な嫌悪を催す程に気色の悪いそれが、見る見るうちに、僅かに残っていた白い部分をも侵食していく。

「ユーリス…っ！」

「…大丈夫だ。これはまだ、全身には行っていない」

「大丈夫なわけないでしょ、馬鹿！！」

襟首を掴まれ、少女が凄まじい剣幕で怒鳴った。

彼は呆然として、なされるがままに揺す振られる。

「なによこれ…なんで黙ってるのよ…痛いでしょ、苦しいでしょ…  
…どうして、一人で抱え込もうとするのよ、我慢するのよ…！」  
「…ルース…」

「言ってくれば、水汲みなんて頼まなかった。体を動かすことも  
困難だって知ってれば、何かをしてもらおうなんて思いもしなかつ  
たのに…！」

「…俺は…」

「私のせいでしょ？ 私がまだ、ユーリスに殺されてないから…！」

「俺は、ルースを殺せない」

決してそれは、荒げたものでも、大きな声でもなかった。

けれどその静かに告げる声は、叫びにも似た彼女の台詞を留める  
には十分で。

「ルースと居ると、今まで知らなかったことをたくさん、知る  
ことができた」

些細なことに感動して、笑って、泣いて　ルシオラは、本当に  
豊かな心を持っていた。

可愛がっていた森の動物が老衰で死んでしまった時は、涙を流し  
て墓を作っていた。

彼の昔の生活について聞き出すと、国王やその他の人間に対して、

本気で怒った。

実の母親について語る時は誇らしげで……けれど、どこか寂しそうで。

精霊達がひよんなことで滑稽な仕草や失敗をした時は、腹を抱えて笑った。

こちらが何か粗相をしでかした時は叱ってくるものの、すぐに、仕方ないと言いたげに肩を竦めて微笑む。

自分が彼女と同じように感じたのかはわからないが、間違いなく彼女のおかげで、彼は彼なりに、『心が動く』ことを、実感出来たのだ。

「……誰も気にも留めなかった俺にも、名前をくれた」

異相の『化け物』に名前が無いことなど当然だと、彼には『邪眼の魔法使い』という通り名しかなかったのに。

「……何故だろう。どうしても、ルースを殺そうとは思えないんだ」  
「ユーリス……」

ぼろり、と少女の至高の瞳から、涙が零れ落ちた。

彼はどうしていいか分からず、無表情ながら困惑したようにその頬を拭う。

頬に触れた手は、呪いに埋め尽くされた方とは反対の手だったけれど、とても冷たくて、いくつもの痛々しい大小様々の傷跡が見えて、彼女は余計に涙が溢れてきた。

どうやって慰めようとおろおろしている様は、とても感情を失くしているようには見えない。

「……べた惚れじゃねえか」

のけものにされたトールは、面白くなさそうにぼそりと呟く。

「…あーあ、世の中は、馬鹿とクズばっかりだな」

どちらがマシかなんて比べるまでもないけれど。

ふと、彼は、森の端から侵入してきた何者かの気配を感じて、整った眉を寄せた。

「…まじで面倒なやつら。無粋だよなあ」

ひとつ、溜息を吐いて。

「……おい」

彼は、重い腰を上げた。

## 第六話：変調の刻は来りて

問われたのは、ひとつの問い。

彼女を死なせたくないか、と。

是、と答える彼に、もうひとつの質問がされる。

生きていたいと思えるようになったか、と。

じつと見つめる黄金の瞳を見下ろして、暫くの後に、こくりと彼は頷いた。

問い掛けた相手は満足げに、そしてどこか嬉しそうにそうかと笑い、言った。

じゃあ、助けてやると。

「いたぞ、王女と邪眼の魔法使いだ!!」

「邪眼の。王専属の魔法使いともあろう方が、何をぐずぐずしておられるのかな?」

偉そうにふんぞり返った初老の男は、国王に重宝されている魔導師だった。

魔導師に比べて魔法使いの数は少ない。

魔法使いは何もせずとも自由に無から有を生み出すことが出来るが、魔導師は精霊を術で使役し、その力を呪文によって行使する。

故に、魔法使いであるユーリスには遠く及ばないものの、その男もそこそこの力を持っていた。

いつもいつも、ユーリスに劣るからと彼を目の敵にしてきた男である。

異相だと嘲笑い、彼を痛めつけることを喜びとじていたような、

碌でもない輩だ。

「陛下はご立腹ですぞ。勅命に逆らえば呪いによって死ぬこと位承知していよう？　その卑しい血筋の娘に惚れ込んだのか？　化け物の分際で！！」

哄笑。嘲笑。侮蔑。

そんなものには、慣れていた。

変わらぬ表情につまらなそうに相手が鼻を鳴らした瞬間、計ったように呪いによる腕の痛みが増し、激痛に目の前が一瞬揺れた。だが、悶える程の苦しみも堪え、崩れかけた姿勢を正す。

彼を支えながら、憤ったように唇を噛むルシオラに、ユーリスは無表情で向き合い、その手を離れた。

「……陛下の、ご命令通りに」

そして彼は、軽く腕を振る。

その瞬間、その場にいた全ての者の、首が飛んだ。

たった数人の、中央から離れていた兵士達と、赤い瞳の魔法使いを除いて。今まで偉そうな口を叩いていた魔導師も例外ではなく、赤い花を咲かせていた。

大量の血飛沫が飛び散るのを、魔法使いはじっと見ていた。顔色一つ、動かさずに。

「　王女の首だ。持って行け」

血濡れの青年は、物言わぬ軀となり果てた王女の髪を掴んで、その頭部を兵士に投げやった。

たった今惨殺された少女の生首を渡された兵士は、悲鳴を上げて首を取り落とす。

兵士たちは、口々に化け物！ と叫びながら恐怖の表情を浮かべて、一目散に逃げて行った。

「…持っていていなくてよかったのか」

小さく呟く。

どうせ、もう彼の命は長くあるまい。

王女を殺せとは言われたが、兵士や魔導師を殺しても良いはずがない。

彼の呪いは王の一声で一気に身体を蝕むのだ。

血のように真っ赤な瞳で、血に塗れた魔法使いは、真っ青な空を見上げて 目を、閉じた。

人間達の争いなど知るものかと、木にとまっていた小鳥は羽ばたき、茂みに潜んでいた野兎は逃げ、草の陰に隠れていた蛙は、ぴよんと跳ねた。

たとえどれだけ人が死んでも、世界は変わらない。

物言わぬ軀を見つめて、彼は段々と、景色が色褪せていくのを感じていた。

以前も、この感覚を感じたことがある。

けれどもあの時よりも更に根幹から、存在が覆りそうな程に、冷たい何かが這いあがってくる。

それが、心が潰れそうな程の絶望だと彼が知るはずもなく。

次の瞬間、強すぎる衝撃に襲われ、世界が暗転した。

## エピソード：そして未来を紡ぐ

「あの化け物は死んだか。汚れ仕事をさせるにはちょうどよかったが　良い。どうせ持て余していた所だしな」

晒し首となった二つの首。

一つは邪眼の男、そしてもう一つは隣国の王女。

森の中に再び立ち入った兵士達が持ち帰ったそれを見て、どうやら自ら命を絶つたようだ、と黒髪赤眼の魔法使いに呪をかけていた術師は報告した。

それを聞いた国王は、まるで鬱陶しい虫が漸くいなくなったとも言いたげな表情で鼻を鳴らすと、享樂に耽る。

国王という権威さえなければただの脂ぎった小太りの初老の男が、豪奢な造りの部屋で、遊女達と戯れていた。

その男にとって、『邪眼の魔法使い』とは、大した意味を持たなかったのだ。

「へーえ。とうとうやっちゃまったのか。残念だなあ……そこまで悪行を重ねなければ、もう少し良い思いが出来ただろうに」

聞き覚えのない低い声が、唐突に国王の寝室に響き渡る。

先刻、術師が立っていたはずの場所に、何故か見知らぬ人間がいた。

「な、何者だ！　無礼者め、わしを誰だと」

「お前こそ俺を誰だと思ってる、このクソ野郎が」

苛立ちの籠った美麗な声がそう言った瞬間、絡み合っていた女達

が一瞬にして変化した。

落ち窪んだ眼窩、獣とも蛇ともつかない恐ろしい容姿。

「ぎゃあああああ！！！」

何度振りほどこうとしても、女達の腕は離れない。

その大きな頭が、男の頭に食らいつく。

「魔法使いの中の魔法使い、千年の長きを生きた『魔法王』とは俺のことだぞゴミが」

この呼び名あんまり気に入ってないけどなー、と彼は近くにいた精霊達に囁く。

神にすら愛されたとされる魔法使いの祖は、ひどく掴みどころのない青年なのだということを知る者は、ほんの僅かしかない。

「ったく、世話のかかるガキ共め」

面倒臭そうに、それでいて楽しみに、世界一の魔法使いは呟いた。それから、国王を始め、その国の王族や政治の中枢を担っていた者達と、隣国の王の正妃などが皆、幻覚を見て叫び続ける程に気を狂わせたことから、二つの国には、王族は呪われるのだという不気味な噂が立ち、圧政を強いられていた民達は蜂起を起こした。

気狂いの者達は薄汚れた塔の中に隔離され、決して正気に戻ることはなかったとか。

唯一、隣国で病に倒れていた王だけは、民にも慕われており、蜂起の直後に病が原因で亡くなったために、丁重に葬られたそうだ。誰も、晒しものにされていた二つの生首がいつのまにかなくなっていたことなど、気付きもしなかった。

そして、いつからか、亡くなった国王の墓の周りに、ある白い花

が植えられていたことにも、人々は首を傾げるだけだった。それが、王が心から愛した女性の名前と同じ花であることを、誰も知らない。

「ちょっと!! 返事は声に出してしなさいって何度も言ってるでしょ!?! 何度言えばわかるのよ!?!」

「……すまない」

「ええーい、このやりとりも何度やれば気が済むのー!?!」

人が滅多に踏み入れることのない、「迷いの森」と言われる大きな森の中で、少女の怒りの声が響いていた。

少し大きくなった小屋は、以前よりも小奇麗になっている。

大分慣れてきた手つきで芋の皮を剥きながら、青年は少女にどつかれていた。

「全く、もう!」

ぷんすかと腹を立てる少女は、短いけれど綺麗な銀の髪と、鮮やかな黄金の瞳を持った可愛らしい容姿をしている。

傍らで調理の支度を手伝う青年は、黒い髪に赤い瞳の、珍しい色彩を宿した端正な顔立ち。

ルースという愛称を持つ少女と、彼女に名付けられたユーリスという名を持つ青年は、森の奥でひっそりと、平穩に暮らしていた。何故二人が生きているのか。

それには、こういった事情があった。

まず、国王からの使者が来た時、彼は土塊で作り上げた少女の人の形の首を撥ねたのだ。流れた血は全て幻影だった。

他に殺されたと思っっている人間達も、外道な行いをしていない人

間ならばすぐに解ける暗示にかけただけで、森の外に放り出したのだが どうしているかは、知らない。

自分で自殺したようにみせかけたが、それも泥人形で、二つの人形の首は、今頃自然に土に戻っているはずだ。

ルシオラは、ユーリスが向き直って兵士達の視界から隠れた瞬間に、彼によつて姿を変える魔法を使われていたので、実はあの場にあった。

……何とも可愛らしい、銀色の蛙の姿で。

これらの出来事を全て入れ知恵したのは、あの飄々としたトールという魔法使いである。

何を考えているのかわからないが、急に、彼の呪いを解いてくれるというおまけまで付けて、手助けをしてくれた。

ユーリスは知らない。

世界一の魔法使いは普段、無闇にその力を使わないようにしている。強すぎる力の行使は、世界のバランスを崩しかねないからだ。

その彼が少しだけ力を貸してくれた理由は、前々から憎からず思っていたユーリスが漸く見つけた「幸せ」を守ってやりたかったからだということ。

精霊に愛された少年の様子を陰から見守りつつ、トールは過去を思い返していた。

世界の均衡を保つ為にも、各地を旅しているトールはある時、一人の魔法使いの噂を聞き、とある国に立ち寄った。

何でも、魔法使いとしてはかなりの力を持っているが、邪悪な瞳を持った異相の少年であり、国王の言いなりであるとか。

実際に会いに行き、その非道な扱いに怒りを覚えたが、呪術は術を掛けた本人にしか解くことができず、術者は巧妙にその身を隠していて、中々尻尾を掴ませない。

無理にその呪いを解こうと力を使えば、世の理に触れることになる。

精霊に愛される人間は希少だ。少年が何の感情もこちらに見せず

とも、何故か彼を気に入ったトールは、彼が望むならばその呪縛を解いてやるうと思っていた。

けれども、少年は何も望まない。そればかりか、生きたいという気持ちも死にたいという絶望もなく、空っぽと言えた。

呪いを解くには、本人が生きたいと望んでいなければできない。

王をすぐに消しても良かったが、その場合は術者が呪いで少年を殺してしまうだろうし、術者を探し出して王の後を追わせても、呪いは残ったままになる。

何か手立てはないだろうか　そう悩みながら、結局できたことは、呪いを緩和させ、その進行を遅らせることだけ。

だから、トールは喜ばしかった。彼が気に掛けた少年が、生きていと思える程に大切な相手と出会えたことが。

しかも、その相手が　。

「まさか、あいつの子孫とはなあ」

彼にとつてはまだ、ほんの少し前にしか思えないが、人の時間に換算すると、遙か昔の話。

親友と呼んで良い程に、仲の良い友人がトールにはいた。

銀の髪に黄金の瞳の青年は、知恵と知識に優れ、いつからか賢者と呼ばれていたものだった。

多少偏屈な所はあったが、何だかんだと世話焼きで、あの少女に良く似ていた。

ふと、顔を真っ赤にして「今見たことは忘れなさいよ」とこちらへ凄んできた少女のことを思い出す。　相手が誰であろうと、あの少女には関係ないらしい。

実に豪胆だ。何で名前を付けて上げなかったのよと責められたことも、中々新鮮な体験だった。確かに、少年に名前がないことを失念していたのは己の過失だ。少年と会っていた時は、ほとんど言葉が返ってこなかったし、どうにか心が開けないものかと悩んでばか

りで気付かなかつたのだ。自分も未熟ということだろう。

いくら振りと言えど、正確すぎる己の魔法で実物のように作りだした少女の首を跳ねたことは、ユーリスに深い傷を与えたようで、彼は兵士達がいなくなつた後、再び内に閉じこもり掛けていた。その心を引き戻したのは、他でもないルシオラで。

「何でよりによつてカエルなんかにしたのよー！」と、乙女心を傷つけられた元王女様は、ツールによつて魔法が解かれるや否や怒り狂い、黒髪の魔法使いの胸倉を引つ掴んで、豪快に頬を殴り飛ばしたのだつた。何かに変身させられるとは知っていたが、カエルにされたのはよつぽど気に食わなかつたらしい。

意識を一瞬飛ばしたが、すぐに目を開き、何が起こつたのかと瞬くユーリス、ぽかんと口を開けてそれを見ていたツール。

啞然とする男共を睨みつけ、しかもやりすぎなのよ乙女になんてもの見せるのよ、等々、ルシオラは散々にユーリスを怒鳴りつける。その烈火のように激しい少女の様子にたじたじになるユーリスへ、次いで彼女は解呪の法を行った。

その様を、忘れるとルシオラはツールに言ったのだ。

少女にひたすら翻弄されたユーリスは、心を閉じる間もなく、あの小屋へと連れて行かれたのだつた。

完全に尻に敷かれていようだが、中々仲睦まじいよつだと、回想を終えてツールは笑う。

あの少女に任せておけば、あの少年も大丈夫だろう。

またいつか、様子を見に来よう　そう思いながら、二人の精霊の愛し子達の微笑ましいやり取りを見守つて、世界で一番強いとされる魔法使いは、姿を消したのだつた。

ふと、夕飯を作る手を止めて、ルシオラは隣で芋の皮を向くユーリスへ尋ねた。

答えをもらっていないことがある、と気付いたのだ。

「あ、そういえば。どうして私をカエルに変えたの？」

「とっさのことで、あれしか呪文が浮かばなくて……」

それに、あれが一番手っ取り早かったと思わず口にして。

乙女心を知らない魔法使いは、近くにあった様々なものを投げられ、命の危険を感じた挙句、暫く愛しの姫君に口を効いてもらえなかったとか。

やがて、その森の中に、夫婦と、愛らしい子ども達の笑い声が響くことになるのだけれど。

それはまだ、先のお話。

あなたは知っているだろうか。

物語の中では、女の髪は強い力がこもりやすいと。

そして、掛けられた呪いを解く方法は、真実の愛の口付けであると相場が決まっているのだと。

魔法使いツールは、呪いを解く方法について二人に知識を与えた。

一つの呪具と、一つの方法を用いるようにと。

その呪いがどうやって解けたのかは、銀の乙女が顔を真っ赤にして断固として口を割らなかつたので、真相は定かではないが 結果を見れば、おそらく誰でもわかるだろう。

この物語も、例外なく、こう終わる。

めでたしめでたし、と。

このように書くと叱られそうだが、我が祖母ながらに、彼女は可愛い人であった。

“フーツラ・フィーネ著『カエルの王女様』より”

## エピソード：そして未来を紡ぐ（後書き）

一話一話の長さが安定しない話ですみませんでした。どこで切つていいかわからず…！

大分昔に書いた話を改稿したので、読みづらいかとは思いますが、応本編は完結です。

もしかしたら外伝とか番外編とか書くかもしれません。

感想を頂けるととても喜びます。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5653k/>

---

カエルの王女様

2010年10月21日23時36分発行